

# 押しかけ理事会 in 松江・境港

東洋のヴェニス・斐伊川沿いの地域を考える



平成 30 年 7 月

都市環境デザイン会議（JUDI 北前船プロジェクト）

## 目 次

はじめに .....	1
参加者による提案	
1. 伊藤 登 (株)プランニングネットワーク) .....	3
2. 稲田 信之 ((有) アトリエ貌) .....	7
3. 工藤 勉 (Y S ポール(株) .....	8
4. 栗原 裕 ((有) ユー・プラネット) .....	10
5. 杉山 朗子 (株)日本カラーデザイン研究所) .....	14
6. 須田 武憲 (株)G K設計) .....	18
7. 高見 公雄 (法政大学 デザイン工学部 都市環境デザイン工学科) .....	20
8. 高原 浩之 (株)H T Aデザイン事務所) .....	22
9. 富岡 仁計 (株)住軽日軽エンジニアリング) .....	24
10. 灘 英樹 (境港市役所) .....	26
11. 平松 早苗 (株)ars 設景研究所) .....	28
12. 山崎 洋二 (都市創造研究所) .....	32
13. 埴 正浩 (株)日本海コンサルタント) .....	34

## はじめに

この度は、都市環境デザイン会議（以下、JUDI）の押しかけ理事会 in 松江を開催にあたり、松江市における大橋川の改修計画や周辺のまちづくり、境港市における水木しげるロードリニューアルについて、ご説明と意見交換をしていただきました国土交通省中国地方整備局出雲河川事務所、島根県、松江市、境港市の皆様にご挨拶申し上げます。

私たちJUDIは、まちづくり、建築、土木、ランドスケープ、照明デザイン、コミュニティデザイン、各種メーカーに所属する専門家、学識経験者などが参加する全国組織の団体です。都市環境デザインに携わる様々な分野の人々が結集し、ネットワークを確立するとともに、よりよい都市環境を形成していくために、1991年に設立しました。

今回は、「JUDI北前船プロジェクト」の第二回として、松江市・境港市を訪問させていただきました。このプロジェクトは、地域でまちづくりや市街地活性化などの支援を行っているJUDI会員（以下、HOST）の要請に基づき、全国のJUDI会員がHOSTに対する支援を行うことで、HOSTを通じて全国の都市環境に関する問題解決の支援を行う取り組みです。今回の場合は、丁度、島根大学に短期で勤めておられました高見公雄さんがHOSTとなり、調整をして頂きました。

このプロジェクトが地元の皆様にとって、多少なりとも参考になればと思い、参加者全員が今回の松江市・境港市を訪問したことの感想や提案をレポートにまとめました。各々専門や価値観が異なることから、一貫性のあるまとまった内容ではないと思いますが、ご一読賜れば幸いです。

また、JUDIでは、公募型プロジェクトという応募1件あたり10万円を助成する制度があります。松江市や境港市のまちづくり活性化の一助として、地域のまちづくり団体やNPOなどが主体となり、社会実験などに活用することをご検討され、JUDIメンバーらと共に応募されることをご提案いたします。

最後になりますが、私たちJUDIを快く受け入れて頂きました皆様に改めて感謝申し上げますとともに、松江市、境港市の益々のご繁栄を心から祈念いたします。

平成30年7月吉日

都市環境デザイン会議 参加者一同  
(JUDI北前船プロジェクト)

参加者による現地視察



## JUDI 北前船プロジェクト 松江・境港

伊藤 登 (株)プランニングネットワーク)

今回の JUDI による松江の訪問は、松江城を抜きにしてまち歩きを行い、これから展開する大橋川改修とそれに関連する都市づくりについて議論するためであった。当日は、あいにく強い降雨であったため、写真撮影は叶わなかった。ここに記載した写真は、以前に撮影したものである。

## 1. 松江

### ① 水郷都市松江の魅力

街なかを歩いていて感じることは、大橋川や京橋川をはじめとする河川・堀川であり、それらが市街地に網目状に存在して、いたるところでそれらの存在を認識できることである。日常の生活景の一部として水辺があり、また水面までの距離が近いことが、河川・堀川の魅力を高めているといえよう。観光客向けには、堀川めぐりの船があるが、水面上からの視点があることも大きな魅力のひとつである。

たとえば、京橋川ならば川幅 20m 程度に対して、架橋間隔が 80~150m 程度であり、ヒューマンスケールの身体感覚に優れた水辺空間が作りだされている。



■京橋川と堀川めぐり

改修が予定されている大橋川は、京橋川等の都市内中小河川と比較してスケールが大きいものの、松江大橋～新大橋間で川幅 130m 程度であり、橋間 340m 程度である。この川幅は、景観的には人の活動の識別限界に近い距離である。対岸の人の活動が認識できるということは、兩岸の一体感が感じられるスケールということであり、これもまた水郷都市松江の魅力であるといえる。

■大橋川に架かる橋

橋梁名	宍道湖大橋	大橋	新大橋	国引大橋
路名	⊕松江鹿島美保関係	⊖母衣町雑賀町線	⊕松江島根線	⊕松江島根線
橋長	310 m	134 m	141 m	296 m
幅員	11.6 m	11.1 m	16.0 m	22.1 m
初代架設年度	S.46(1971)	慶長13(1608)	T.3(1914)	S.56(1981)
現況架設年度	S.46(初代)	S.12(第17代)	S.9(第2代,S44拡張)	S.56(初代)
上部工型式	単純合成鋼箱桁+連続鋼箱桁	ゲルバー型式鋼桁	ゲルバー型式鋼桁	単純合成鋼箱桁+連続鋼箱桁
下部工型式	逆TRC橋台,小判型RC橋脚	逆TRC橋台,RCラーメン橋脚	逆TRC橋台,小判型RC橋脚	逆TRC橋台,小判型RC橋脚
基礎型式	井筒	井筒	井筒	井筒

出典:伊藤 慶幸、橋めぐりにしひがし島根県の巻、虹橋 39号、pp.10-18、昭和63年3月、社団法人 日本橋梁建設協会



■スケール感の良い大橋川の川幅



■水面との距離が近い大橋川の水辺

## ② グリーンインフラとしての松江周辺の魅力

大橋川周辺まちづくり基本計画によれば、「宍道湖・大橋川・中海の水辺回遊公園都市を目指す」とある。



■大橋川周辺まちづくりの全体像(大橋川周辺まちづくり基本計画)

これをさらにマクロ的にみると、水を軸とする環境系でつながった斐伊川～宍道湖～大橋川～中海～日本海という大きな流れの中にあるといえる。これは地域的スケールを有するグリーンインフラとして捉えてみる価値がある。宍道湖の湖岸のあり方、松江市街の水辺のあり方、大橋川下流部の田園的な水辺のあり方、中海の湖岸のあり方そして境港市街の水辺のあり方、それぞれに違いと同一水系としての共通性があるものと考えられる。

これらの水辺空間や水面の使い方も含めて、斐伊川水系グリーンインフラとしてこれらを捉えなおしてみることも重要であると認識した。

## 2. 境港

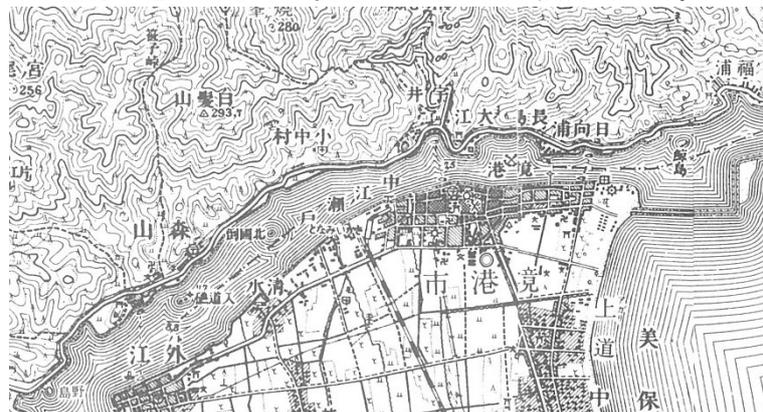
港湾都市としての魅力

今回は水木しげるロードの視察であったが、まちを歩いていて感心したのは、港湾都市としての境港の魅力であった。

### ① スケール感が程よい境水道と港

境港市は、境水道(中江瀬戸)に面して発展した港町である。水木しげるロードは、この港町のメインストリートであり、境水道に並行して通っている。水木しげるロードが観光的な意味合いの強い整備がなされているが、その周囲のまちはかつての港町の面影を残した落ち着いたまちである。そして、この天然の港である境水道に面する港・水辺は、背後を山にした実にスケール感の良い、きわめて魅力的な空間である(下図参照)。

これは他の都市では望むことのできない境港市ならではの資源である。



■境港 (昭和 28 応修)

## ② 港・水辺のまちづくりへの活用に対する期待

境港市における港の重要性は言うに及ばないが、大型クルーズ船の寄港など、新たな役割を担うようになってきている。多くの外国人観光客が立ち寄るようになり、境港は外国人に対して日本の姿を伝える重要な都市としての顔を持つようになったといえる。一方で、水木しげるロードには多くの日本人観光客が訪れることが期待されており、おさかなロードや岸壁沿いの公園整備などによって周囲のまちを巡る仕掛けが用意されてはいるものの、背後のまちを含めた回遊性に乏しいことが課題であるといえる。これは、街なかを周遊するためのサイン類が不足していることにも一因があると考えられる。

水木しげるロードを楽しんだ後は、ゆっくりと港で快適なひと時を過ごす仕掛けが必要であると感じた。しかし、現状は岸壁に緑地が整備されているだけであり、楽しい空間体験が得られる環境とは必ずしも言えない。たとえば、それは岸壁の緑地を活用したカフェやレストランであるかもしれない。公共空間の民間への開放が進んでいる今日、魅力的な岸壁を生かす試みに期待したい。

境港に対するイメージはやはり港であり、それは前述したように背後を山にした実にスケール感の良い、きわめて魅力的な空間であると考えられる。その空間的魅力は、日本人にも外国からの来訪者にも共通に伝わる筈である。



■境水道に面した岸壁と公園的空間

押しかけ理事会 in 松江・境港に参加して（境港は不参加）

稲田信之（(有)アトリエ獲）

### 水辺観光都市松江

初めて訪れた松江でした。雨の中の松江駅を歩き始めて新大橋を渡り、しばらく行って京橋川をわたり左折していくと川の反対側に堀川巡りのカリコロ広場前の乗船場が見えて来ました。最近では東京や大阪も水辺の観光開発が進みいろいろ乗船の機会に恵まれますが、今回の松江では残念ながら遊覧船乗船の予定はなく（有っても、今回は無理であったと思いますが）乗船場に繋がれた船を横目で眺めるだけになってしまいました。

戻り、確認すると松江城を囲む堀川を一周するなかなか見応えのあるコースで所要時間50分とのこと次回は是非とも巡ってみたいものです。

西に宍道湖、松江城の周囲に巡らされて堀川、南に大橋川と言った水に関係する観光資源があふれている松江、来てみて初めて良く理解することが出来ました。つい、松江と言えば隣市出雲市の出雲大社と言った固定概念が浮かんでしまい、水の都と言ったイメージが浮かんで来ませんでした。しかしながら来てみると水の観光資源の多さにびっくりしています。

これだけ、まち中に豊かな水辺の資源があふれており、当然それらを観光資源として利用しない手はなくさっと調べただけでもオープンカフェやそれらを使ったイベントの企画も多くあるようです。今後の開発が楽しみです。

しかしながらこれらの多くの観光資源、国際観光都市と言って過言でない都市にもかかわらず、古い旅館とビジネスホテルだけでシティホテルが一軒もないとのことで、ご案内頂きました市の担当者も嘆いておられました。隣接の出雲市には10月に日本中の神様が集まれるお国柄、松江には世界中の方が大勢いらっしゃってもおかしくない国際観光都市、やはり古い旅館も魅力的ですが一館ぐらいいは国際的な催しの出来るシティホテルが国際観光都市として発展していくためには必要かと思えます。

### 治水対策

これらの多くの水辺観光資源に恵まれた地形は、反面水による大災害にも多く直面してきたとのこと、先日の西日本の大災害のごとく水による災害は多くのものを奪っていきます。明治26年10月豪雨では市内ほとんどが水没したとのこと、昭和47年7月にも20000戸が浸水する豪雨が又平成になっても18年7月には1400戸が浸水する豪雨に見まわれたとのこと、今後の水辺の魅力を生かした国際観光都市を目指すにしても、早急な治水対策が望まれるべきで、流域全体の治水対策の3点セットの完成が望まれるのではないのでしょうか。



平成18年7月豪雨（国土交通省 HP）

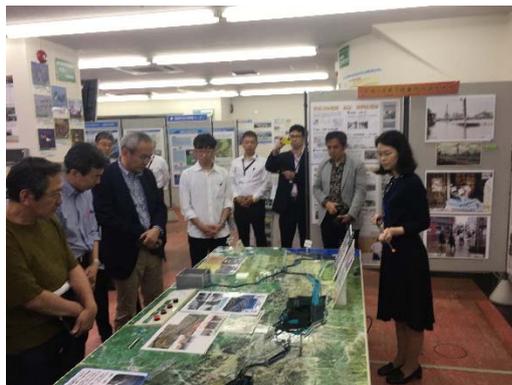
## JUDI 北前船プロジェクト in 松江市/境港市

工藤 勉 (YS ポール(株))

## &lt;松江&gt;

生憎の雨模様での見学のため思うような視察が出来なかった事が残念です。松江付近にはかなり前から営業活動で訪問していたが、大橋川沿いへの関心は全くなかった。大橋コミュニティーセンターでは宍道湖、中海をつなぐ川として重要な役割を果たし、その境界も商業の発展による歴史もあることが十分知ることが出来た。川の北側は官庁や飲食街が充実しており、お堀の船着場など再整備され観光地としての役割を果たしていると感じた。南側の白潟通りは、以前は中心的な商店街だったようだが、シャッター通りとなってしまっている。山陰合同銀行付近の拡幅工事などが進んでいけば期待できるだろうか。東側は寺院が多く歴史を感じる街並みで一体型の整備計画も考えられるのではないかな。

大橋川は宍道湖と中海の間を取り持つ調整川として役割を持つようだが、河口を拡幅し調整能力を高めていく整備計画があるようだが、市民が河川に馴染む親水とまでの整備はできないものか。兩岸は歴史的な背景も深い地域だけに、河川防災だけの考えに偏らず、街づくり再生も考えた上での検討を行ってみてはどうかと思う。



## ※個人的な事

松江市内の宍道湖周辺街路灯や松江北公園線街路灯、交通信号などに関わる仕事をしており市内を視察できたことは有意義なことだった。

## &lt;境港&gt;

人口約 33,000 人にも関わらず、米子空港や国関連の施設（港湾・漁港）などを備えた境港市。街のシンボルである水木しげるロードの再整備を視察した。ゴールデンウィークには約 23 万人の観光客が訪れたようで人口の 7 倍にも達する。商店街はそもそも観光地としての目的では無いように思え、水木しげる効果で無理やり観光地化した感じがした。今では観光目当ての商店が進出し、地元商店への刺激にもなっていると聞いた。約 800m の通りも一方通行にすることで車の流れを変え、大型バスも近くに備えていた。観光客はインバウンド効果もあり外国人観光客も多く見られていたが、その対応がどうかはまだ出来ていない感じがした。インフォメーション的な場所も無く、歩行者サインの多言化したものも見受けられない。この点を改善していく考えのようだが、根強い人気に対してのソフト的な対応が今後求められるのではないかな。夜の照明を特徴ある設計にしている影絵や妖怪風な演出を今回の整備を行ったようだが、宿泊設備の充実も今後

の課題か。夕刻に照明演出を体験、夕食後に米子のホテルへ帰すのか市内に留めるのか。年間 200 万人の観光客への対応を、この再整備にあたり検討していく必要がある。



松江、境港の視察を通じこの一体は県境に関わらず繋がっていると強く感じた。防災の面では斐伊川、宍道湖、大橋川、中海の一連の関わり、観光面でも松江城周辺や足立美術館、皆生温泉、水木しげるロードなど。米子空港を中心に自治体の連携がますます必要になっていくのではないかと思います、今後に期待したいところです。

## 『水木しげるロードリニューアル』設計者の立場から

栗原 裕 (有)ユー・プラネット)

2018年5月18日(金)と19日(土)の二日間にわたって「Judi北前舟プロジェクト 押しかけ理事会 in 松江 『東洋のヴェニス・斐伊川沿い地域を考える』」が開催された。

飛行機の関係で初日の松江に関しては途中参加となったこと、また、雨でほとんどまち歩きができなかったことから、2日目の境港について「水木しげるロードリニューアル工事」の設計者の立場から感想を述べたい。残念ながら当日はまだ工事中であったので(7月14日、リニューアルオープン)全容(特に夜間照明)をご覧いただけなかったのが残念です。

## 1. 水木しげるロードの概要

水木しげるロードは、JR境港駅から水木しげる記念館(本町アーケード、今年度撤去)までの約800mの区間である。この内、JR境港駅(駅前広場を含む)から河童の泉公園の交差点までの約200mが県道であり、残りの約600mが市道となっている。

今回のリニューアルに際しては、県道部分を除く市道部を一方通行化し(本町アーケード部分約100mについては従前から一方通行)、歩道幅員を拡幅すると共に車道を蛇行させることにより歩道に溜まり部分(小広場)を創出させた。

県道部分については、当初は妖怪ブロンズ像再配置、植栽の変更、演出照明の変更のみの予定であったが、地元との調整等を踏まえ、車道部(半たわみ舗装)、歩道部(来待石風平板)の舗装も市道部に合わせることにした。

## 2. 整備内容の概要

## ① 舗装材(歩道)

歩道の舗装材についてはいろいろの材料の検討を行った。最終的にはブロンズ像を引き立たせ、かつ、落ち着いた風合いの、境港市の隣の島根県松江市宍道町来待地区で産出する「来待石(凝灰質砂岩)」を採用する方向で検討を重ねたが、産出量が少なく価格的にも高価であったため、来待石の加工くず(切りくず)の粉を表面に混ぜた平板(来待石風平板)を作成した。

また、縁石については中海の大根島(島根県松江市八束町)でとれる黒い溶岩風の島石(堅硬多孔質の玄武岩)を採用する方向で検討を重ねたが、これも産出量が少なく価格的にも高価であったため、本石よりゴム型を起こしコンクリート二次製品(島石風縁石)を作成した。

なお、視覚障害者用ブロックについては、黄色であると全体の雰囲気損ねること、来待石風平板との輝度比(2.0~3.0)を確保できないことから、視覚障害者団体と調整して島石に近い黒色とした。



## ② 舗装材（車道）

車道の舗装材については、自然石、インターロッキングブロック等いろいろの材料の検討を行ったが、色違い等の演出が可能なこと、車道としての強度が十分に保たれること、それなりに安価であることから半たわみ舗装を採用した。ただし、半たわみ舗装はカッター目地を入れショットブラストをかけることにより自然石風に見えるよう工夫した。

なお、車線部と路肩（自転車走行レーン）は半たわみ舗装のセメントミルクの色により区分し外側線は設けていない。

また、道路排水については自転車の安全走行、イベント時等、交通規制により前面歩行者道路とする機会も多い道路としての景観に考慮して鋳物のスリット側溝とした。

全体としてはセミフラット歩道であるが、交差点部はハンプとすると共に歩行者の通行に考慮し車道を4cm上げて段差1cmとした。

なお、沿道商店の荷捌き等のため数カ所荷捌きスペースを設置した。



## ③ 小広場（溜まりのスペース）

車道（車道幅員5m）を蛇行させることにより、歩道部（歩道幅員4~6m）に小広場（溜まりのスペース）を創出した。

この小広場はイベント等で使用するほか、写真撮影の場、ベンチ等を置いて休憩の場等色々な使い道が考えられる。

なお、植栽や妖怪ブロンズ像、照明柱等のない純粋な歩行用スペースとして、最低幅員2mを確保した。



#### ④ 植栽

植栽は各ゾーン毎のテーマに合わせ計画した。

駅前通り（県道部）は妖怪チックな樹木である「シダレヤナギ」をメインとして配置。市道部の入口である「妖怪の森」ゾーンには既存のヒマラヤスギを初め高木、中木を数多く配置すると共に、株立ちの樹木を交え変化に富んだ森の空間を演出した。

なお、高木・中木の根元については、人が歩く部分には来待石風平板を貼った樹木保護盤をその他の部分についてはより森らしく感じさせるために地皮を植栽した。

各樹木には、LEM長町志穂氏（JUDI メンバー）によるライトアップ照明が設置されており、夜の多彩な演出が施されている。



#### ⑤ その他

演出照明については前出したようにLEM長町志穂氏の計画なのでここでの説明は省くが、写真を数枚添付するのでその雰囲気を味わっていただきたい。

その他として、交通安全面から演出照明とは別に縁石照明を設置した。これは夜間、自動車、



歩行者に交差点であることをわかりやすくするために、LED照明を埋め込んだ縁石を配置した。なお、災害時等を想定し、各場所の内1灯はソーラー照明とした。

また、昭和の雰囲気を演出すると共に、子供達の遊び場、犬の水飲み場としても活用できるように、井戸を2箇所設置した（飲用不可）。



⑥ 夜間演出



## 松江は「おんぼら」のまち

杉山朗子（㈱日本カラーデザイン研究所）

松江は、私にとって「地域イメージと景観の色彩」を強く意識させてくれたまちであり、市民のワークショップの効果を実感させてくれたまちである。周辺の山陰地方独特の石州瓦の赤や築地松なども地域らしい景観を気づかせてくれた。当時松江でまちづくりに取り組んでいらしたコンサルタント会社を介して調査やワークショップをさせていただくチャンスに恵まれたからである。その後、縁遠くなっていたのだが、JUDIで押しかけるということを知り、20年のご無沙汰ながら伺わせていただいた。

激しい雨の中、ほんの短い時間の滞在なので、印象で語ってしまうことをお許しいただきたい。

「松江」に対してどのようなイメージを持っているかを、簡単なイメージ調査を行った。この結果は、なかなか他では見られない、特徴的な結果であったので印象深かった。2年後に実施した同内容の調査の結果もほぼ同じで、びっくりするほどであった。

全体をまとめるとナチュラルでシック、キーワードとしては風流、情緒的、閑静等が代表的である。上位10位までのワードの回答率は40%をこえている。皆さんは、このような調査結果はよく見ていらっしゃると思われるが、なかなか高い数字だとお感じになるのではないだろうか。この調査結果では、松江のイメージ相応しい色は、やや明るめで低彩度の色彩であるという傾向が読み取れる。

まちの中心部の京橋付近をみると、昭和13年竣工の旧日銀の建物に合わせて大正～昭和を彷彿とさせるおだやかなトーンの照明柱の色がそのグレイッシュな松江の雰囲気と調和しているように感じられた。調査結果と合致していたので、景観色彩の検討方法を書いた拙著にも市の許可をいただいて掲載させていただいている。

今回再訪した松江では、きれいに整備が進んでいて、ややメリハリの利いた、白漆喰と濃いトーンの対比に変化しているようであった。色彩使いは、時代とともに変化するものとは思いつつ、特徴がはっきりしていた、風流で奥ゆかしい松江らしいイメージを活かした色使いもどこかで繋げて行ってほしいという思いで、当時のデータを再掲してみたい。ワークショップで市民の方に教えていただいた松江を一言で表現する方言「おんぼら」は、いつまでも忘れられないワードの一つである。



1999年撮影

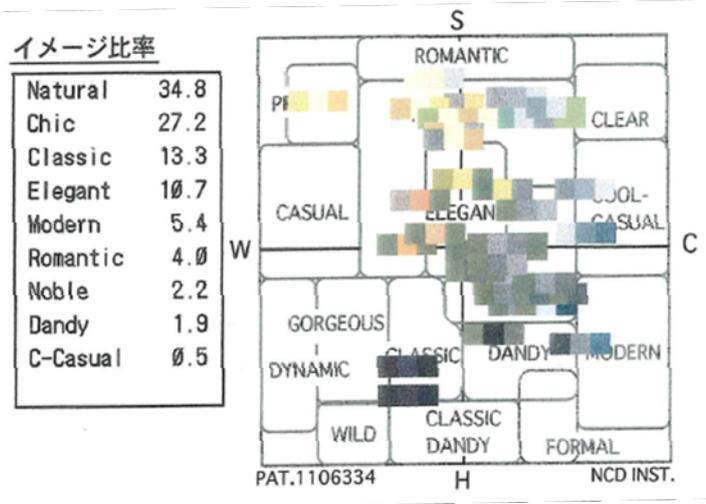


2018年撮影

■1999 年実施のデータベースイメージ調査結果

180 の形容詞群から松江のイメージに相応しい形容詞を 20 個選択する手法

	形容詞	回答率
1	伝統的	70.5
2	古風な	59.1
3	情緒的な	56.8
4	地味な	47.7
	静かな	"
6	控えめな	45.6
	おとなしい	"
8	素朴な	43.2
	のんびりした	"
	文化的な	"



■ワークショップの意見一覧

誇りに思う場所	松江城	風格はあるがごちんまりしていて、美しくちょっと控えめ 白漆喰と黒い板貼り、銀鼠瓦、単色でない味わい深い瓦のグレー 石垣、石積、松、松並木、武家屋敷、周辺の閑静さ、城下町的曲がった道
	宍道湖	朝の宍道湖、宍道湖の夕日、雨の宍道湖、波のない宍道湖、水の流りが緩やかで 情緒的、派手さがなく柔らかな水の都、シジミを採る舟、堀川の舟
生活文化	季節感	季節感を大切にする日常生活
	お茶文化	静けさとゆったりした気持ちを与えてくれるお茶の文化に育まれた日常生活、 素朴な和菓子-抹茶の色、上用饅頭の皮の、餡がうっすら透けて見えるような色
まち並みの特性	サイズ	路地の隠れ家的空間構成、大きなスケールは似合わない
地形		低い山に囲まれた風景、霞んだ青っぽい山並み
天候・気候	天気	松江に似合うのは、雨、曇り空、霞、霧
	季節	グレイッシュな冬の松江
雰囲気		のんびり、ゆっくり、素朴、控えめ、奥ゆかしい
色彩	基調	彩度が低い色、水面、霧の色、空の色、水の色
	刻々と変わる色	季節、天候、時間、見る角度によって色が変わる 夕日はオレンジ～茜色～紫霞の色 春のぬくもりの色-暖かくぬるくなくほんわかとした色、刻々と変わる冬の色
方言	おんぼら	控えめ、奥ゆかしい、肌に馴染みやすい、おちつきのある、のほほん、のんびり

## これからますます楽しみな水木しげるロード

境港市の水木しげるロードの整備は新聞をにぎわすほどのプロジェクトであったが、なかなか訪問の機会を得られなかった。夜も楽しめそうなまちへ変身する今回の整備は水木ファンだけでなくとも興味深いだろう。

### まち歩きの魅力の増大

整備した地区が駅から遠いところも多い中、駅を降りるとすぐに出迎えてくれる彫像や街路灯、広場など期待が高まる。

道を進むと地域の特産である来待石らしい色の舗装が続き、柔らかな質感も相まってホッとします。意外に盲点になりやすい足元をきちんと考えていて、歩いていてほっこりする。



そして、この沿道の見事な街路樹はいったい何だろう！と心惹かれる。枝垂れ槐の風変わりな枝ぶりが妖怪にぴったり。扱いに困っていたところからの移植というようなこともおっしゃっていたが、この本数を集めるのは大変だったろうと苦労が偲ばれた。枝が伸びたものは中に空間があり、それこそ隠れ家風でこのロードに相応しい。一本一本ゆっくりみても歩きたくなる枝ぶりである。

## 落ち着いたサイン計画

そんな緑の中、サインカラーは初期からの継続と思われるが、落ち着いたトーンでおどろおどろしい妖怪の色のベースとしてまとまっている。

商店街は昭和が全盛期だったようで、その面影を残しややレトロなデザインや色をまとって、何げなく統一されている。そんな中を子供たちがスタンプラリーや、お土産物を探して歓声を上げている。



## 今後の期待その1－生活の歴史と妖怪の楽しさの相乗効果

駅から隣接したところにはホテルがあり、飲食店も人気があるようだ。そこからほどなく、鳥取県でもよくみられる赤い瓦の民家に差し掛かる。ここもお休み処や飲食店などになっていると、この地域らしい魅力的な拠点になりそうである。続いて酒造も並び、境港の風格も感じさせる一角である。水木ロードの不思議さとの対比が今後一層期待される。さらには、水木ロードの先にある魚市場へもつながる地元の生活の歴史との合体も楽しみである。



## 今後の期待その2－自動販売機や駅のホームの屋根など

基本的な整備はほとんど行われているが、自動販売機など、まだ共通で考えられるものも少し残されているかもしれない。キャラクターの車両が走る鉄道の駅舎も、ホームの屋根の色など、メンテナンスの時期に合わせて、妖怪関連の色にするのか、ベースのまとめのカラーにするのか考える余地もありそうである。ディティールの色やデザインがしっかりしていると、より完成度が高まると思われる。



## JUDI 北前船プロジェクト in 松江市/境港市

理事 須田 武憲 (株)G K設計

### 1. 現地視察での気づきと景観資源/松江市

#### ■斐伊川水系の豊かな流域景観

松江市内を歩いていて、まず気がつくのは水面の近さである。今回の訪問ではじめて斐伊川水系の壮大な流域と都市との関係を認識したが、宍道湖という巨大な遊水域の存在によってまちと水が極めて親密であることを感じた。

#### ■まちと水面との接点

まちと水面の接点である石垣の護岸が代々にわたり私的に造成されて来たようで、今ではまちの重要な景観要素となっている。中心部である京橋川の護岸は場所により二段護岸化が形成され水面に近いフットパスが形成されており、一部はそこから直接店舗に入れるようになっているが、歴史的蓄積を非常にうまく活用したすばらしい事例である。

#### ■川、用水、水路のネットワーク

20万都市であり、これだけの水系ネットワークを持ちながら護岸が極めて低く、舟運の活動も見えやすい。松江城も含めた水路ネットワークの活用が望まれる。

#### ■歴史資源や緑の見えにくさ

寺町周辺を展望室から俯瞰したが、上から見ると社寺の緑や極めて奥行きのある町家の坪庭など、歴史的な景観資源を確認することはできたが、まちを歩いているとその良さがなかなか見えにくい、町家の奥行き感や佇まいを生かした景観形成方法もあるのではないかと感じた。



### 2. 都市景観再生のためのヒント

#### ■豊かな水を巡るネットワークの構築---水の回廊

これだけ豊かな水資源は本当にそう簡単には手に入りません。現代社会は便利さと引き換えに多くのモノを失ってきましたが、特に今の若い世代は本質的な価値を直感的に嗅ぎ分ける能力が高いと思います。これからの世代のためにも、水面に近いまちの構造や水路や用水を少しずつでもよいので復活させ、水資源の本質的価値の見える化を図っていただきたい。ぜひ水を巡るネットワークの再構築---「水の回廊」を再生してください。

#### ■歴史的景観の再生と積極的な利活用

川沿いの護岸と店舗の一体利用などの連たん化、町家の店舗としての再生利用など歴史的遺産の有効利用を図ってはいかががでしょう。再開発等の手法だけでなく、時間の堆積に価値を見出だす時代に合った、小さな投資で小さく始める街の作り手、担い手が参加しやすい手法で進めてはいかががでしょうか。

### 3. 現地視察での気づきと景観資源/境港市

#### ■ 中海の水景観

松江から境港に移動する途中で枕木山から中海を俯瞰した。中央に浮かぶ大根島の北側に干拓計画があったようだが中止になったとのことで、この景観が保全できたことは本当に素晴らしいと思った。島への堤防道路も水位変化の少なさを生かした水面が近い快適な道だった。



#### ■ 生き続けている昭和の風景

水木しげるロード他、市内を巡ったが水木しげるロードの並外れた集客力がもたらした効果の一つとして、昔ながらの昭和感の溢れる商店や店舗が今も現役で生きていることである。土産物屋の勢いに隠れて見逃しがちだが、歩道上のアーケードとともに、まちの時間の体積に価値を見出す、これからの時代のあり方を先取りしたよい景観整備だと思う。



#### ■ 斐伊川水系の最終章としての境水路

最後に境港のある斐伊川水系の末端でもある境水路をおとずれた。北の島根県側の半島に遮られた天然の良港を形成しており、背景に山を見ながら大きな漁船が並ぶ風景は独特の景観である。河川管理区分と海洋管理区分の境を示す表示板を見て、斐伊川水系の最終章にたどり着いたことを実感した。



### 4. 都市景観再生のためのヒント

#### ■ 賑わいのネットワーク化

水木しげるロードを一步抜けると全くひとけがなくなり寂しい印象です。魚というコンテンツで賑わいを誘導しようとしているので、空き店舗等のマッチングによる街の担い手育てなど、ソフト、ハードの両面でのサポートを市域全体を範囲として展開されてはいかがでしょうか。

#### ■ 緑の維持管理

水木しげるロードの植栽は移植を含め、とても緑量が豊かで特徴的です。一般的な街路植栽管理だと徹底的に刈り込まれてしまうので、違う枠組みで植栽管理を考えてはいかがでしょうか。

### 5. おわりに

松江市、宍道湖、中海、境港市など教科書的に名前を知ってはいましたが、この一帯が斐伊川水系という広大な流域の地勢によって連たんだ水辺文化が形成されていることは、やはり現地を訪れ話をお聞きしないと認識できないことでした。その認識の中で、各都市の都市景観と水文化の議論ができたことは大変有意義な体験でした。ありがとうございました。

## IR ではなく

高見公雄（法政大学 デザイン工学部 都市環境デザイン工学科）

## 1. 押しかけ理事会 in 松江の狙い

「押しかけ理事会 in 松江」は JUDI 北前船プロジェクトの一環のようでもあり、そうでないので私が案内として作成したチラシには北前船の文字を前面には出さなかった。「都市デザインの観点から見た斐伊川沿川市街地の形成と今後に関する研究」との題目で所属大学からもらった国内研究の機会。2018 年 4 月から 6 月の 3 カ月間、在籍先は島根大学総合理工学部であった。そこへ JUDI 理事会が押しかけてくるという。従ってこの成り行きからは北前船というより、単なる押しかけ理事会であろうと思い、そう位置づけた。松江と言えば美しい城下町であり、一方県庁所在都市でありながら中心商店街の疲弊は著しい。かつて賑わった白潟本町など、ここが商店街であったことすら分からないような姿である。JUDI メンバーの来松に際し、中心市街地活性化をテーマにしようかと最初は考えていた。ところが、4 月半ばから松江に滞在する中で、この町が持つ大きな可能性に気づいた。暴れ川である筈の斐伊川水系であるが、巨大な調整池機能を果たす宍道湖と中海のおかげで、松江市も境港市も市街地の地盤と水面が考えられないほど近く、干満の差も極めて小さい。この水辺空間の魅力と価値について考えることを押しかけ理事会のテーマにした。



図 1 市街地と水面は極めて近い

## 2. 恵まれた地形と先人の努力と

そうはいっても松江の町は水害と無縁ではない。近年では平成 18（2006）年に大規模な浸水があり、過去では昭和 47（1972）年等に大規模な水害を経験している。しかしながら、ここでも巨大な調整池が機能しており、この地域の水害はゆっくりと水位があがるのだそうだ。したがって、浸水はするが人的被害は多くは出ない。このことが無堤に近い水辺を可能にしている要因だと思う。一方、国も地形にのみ頼って治水を考えている訳ではない。斐伊川の上流には斐伊川放水路というものすごい人工物がある。国が 2,500 億円を投じて整備したこの巨大な放水路は、中国山地から北上する斐伊川について、通常は東に折れ宍道湖へ注いでいるルートを西向きに切り換え、直接大社湾へ注ぐようにする。巨大公共事業の是非論も出て来そうな巨大物ではあるが、この存在が松江市街地の治水安全性を高め、水辺空間を成立させている。

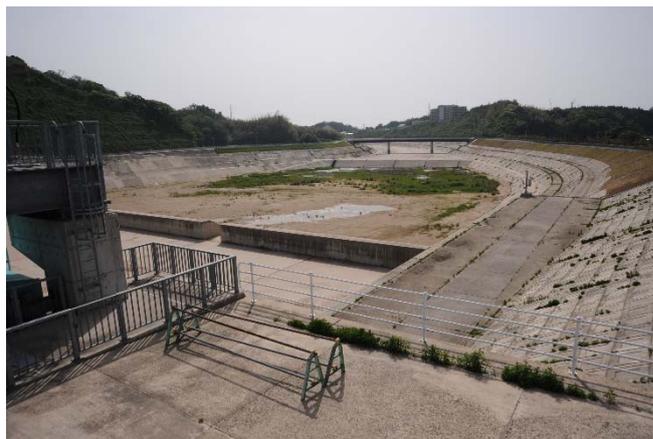


図 2 斐伊川放水路

### 3. 松江・境港地域の特色と可能性

山陰地方というと、東京など遠くから見ると、人口減少の最先端地域であり、誰もいない疲れた場所だと思われている面もある。私は3年前に機会あって境港市で街づくりに係る講演をさせてもらったことがあり、その際、次のように主張した。山陰地方は人口減少が全国に先駆けて進んだ結果、既に減少度合のピークを越え、今後は安定した人口動態が見込まれる。荒波の後にどのような落ち着いた社会を作っていくか、先進地として意欲的に取り組むべきであるし、

全国の参考にもなる。図3は私たちが10年程前に全国を対象とした調査で作成したグラフである。都市圏別の中心市と周辺町村の人口増減が2030年までにどのように推移するかを表している。この中、中央部に着目すべき都市圏群があった。松江、米子、鳥取都市圏の中心市が平均値より上に頭を出しているのである。これが先の人口動態に関する見方の背景となっている。繰り返しになるが、人口減のピークを越え、今後安定していくこの都市圏ではかつてより人口規模の小さい、そして地域の資質を活かした新たな街づくりのビジョンが求められているし、それを実行する良い時期を迎えていると言えるのである。

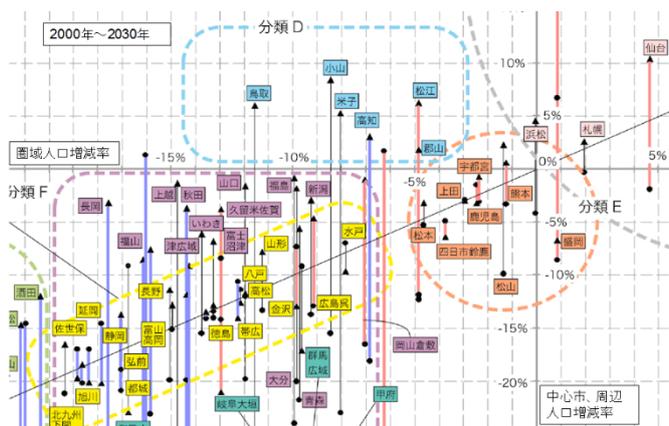


図3 都市圏別中心市周辺町村別人口増減

### 4. 誰もが滞在したくなる魅力的な地域創出・・・こういうのをIRというのではないのか

宍道湖から大橋川を経て中海、境水道へとつづく斐伊川とその沿川には全国ではほぼ例が見られない、人々が活動する土地と水面が極めて近く、無堤または無堤に近い水辺空間が広がる。その驚くほど爽快な空間はない。また、松江市という歴史があり美しく、そして現代都市として一定以上の経済活動を持つ。これらを活かし、これまでにはなかったような長期滞在を視野に入れた総合的なリゾート（と書いてしまうと意味合いが少し歪むが）地域として作り代え、例えば余りにも新鮮な海産物など、現在も地元の人々が享受している豊かな生活環境を多くの来訪者が経験できるといった地域の創出はどうだろうか。日本人もついに働いてばかりという生活から脱しようとしている今、施設型のように大金をかけるのではなく、優れた自然と美しい都市に触れて滞在する地域、こういうのこそ総合型リゾートというのではないかと、テレビでの馬鹿げた論戦を見ながら夢見ているのである。



図4 水と集落と山、全てが近い

## 北前船プロジェクト in 松江&amp;境港

高原 浩之 (株)HTA デザイン事務所

2018年5月18日(金)～19日(土)、今年の北前船プロジェクトJUDI 押しかけ理事会は、松江駅前2時集合とのことで、大阪からのアクセスを探してみると、岡山まで新幹線でJRを乗り継いで行くルートと大阪から直通バスで向かうルートが最短で、どちらも4時間程度。行きはバスでのアクセスを試みた。金曜日の朝便とあって、乗客はまばらで10人程度。北前船の時代、多くの物資が大阪に運ばれ、多くの人や文化が交流したはずである。

現在の松江と大阪の文化や人の距離感は、果たして近づいたのだろうか？等々、思いながら20年ぶりの松江と境港のまち歩きに期待を膨らませて訪れた。

## ■東洋のヴェニス松江から学ぶこと

今回の企画のタイトルは、「東洋のヴェニス・斐伊川沿い地域を考える」と題された今回のJUDI北前船プロジェクト。大阪も大大坂(だいおおさか)時代は、水都大阪と言われ、今は、水辺の賑わい再生計画が進行中である。

松江から学ぶことはないかと思いつつ、まち歩きの前に、斐伊川、大橋川の治水の歴史、現在の活動を大橋川コミュニティーセンターにて模型やパネルと一緒に説明を頂いた。大いに学ぶところとしては、これらの事業を国、県、市が一体となって進めているとのことだと思う。また、改修堤防のかさ上げ高さが、1m程度で済むとのこと。東日本大震災以来、「堤防」と聞くと、水辺景観がなくなるのではと懸念してしまうが、松江の水景の良い所である水面の近さが維持できるようで、今後も東洋のヴェニスに例えられ続けるのではと思う。

堀川めぐりの乗り合い船は、その水面の近さ、乗り降り自由一日乗船券が1230円、屋根付、冬季にはこたつ付、船頭の案内付で、観光客に人気とか。このお得感は、大阪も取り入れるべきかもと感じた。今回はたった半日の滞在、しかも雨模様で、特に川沿いの景観や遊歩道を歩くことができなかったが、次回の松江視察では、より大阪の水辺再生に生かせるヒントや交流が生まれることを楽しみにしている。



## ■再び訪れたい「水木しげるロード」

境港へは、以前建築雑誌で話題になった高松伸設計のフェリーターミナル前に着いた。雑誌で見ると、小さな建物でどこかほっとした。1階はチケット売り場、観光案内所などがあり、2階には、境港市が運営するギャラリースペース、3階には、温浴施設もあるようで、ちょうどよい

スケール感を持った施設だった。この建物とJR 境線の駅との間を抜けると、ゲゲゲの鬼太郎たちが待ち受けてくれた。

先週行われた「スマホは都市環境デザインを変えるか？」というテーマのJUDI 関西フォーラムで勉強したばかりのインスタを早速に起動。インスタ映えするアングルを探して、シャッターを切りまくった。水木しげるロードリニューアルには、多くのJUDI メンバーの方々が関わっただけに、大いに期待をしていた。さすがに来訪者をワクワクさせる力を持った場所である。加えて、本日のご案内をして頂いた境港市役所の灘さんは、追い込み作業をしている職人さんたちや地元のお店街のお母さんたちと親しく会話しながら、隅々まで熱心に説明して頂いた。

まちづくりの成功に欠かせない、「地元の熱い思い」「他のまちとの差別化」「マーケティングの視点」をコーディネートし、それらを一つの形にして行く「デザイン力」を目の当たりにして、大きな刺激を頂いた。174体の妖怪ブロンズ像を配置し、道端では妖怪に着ぐるみに出会う。そして、大阪への帰路は、JRで境港駅から鬼太郎列車に乗ると、米子までの15の駅名にそれぞれに、別名で鬼太郎駅、一反木綿駅、傘化け駅・・・と見るだけでも楽しい仕掛けがあり、余韻を楽しませてくれた。

水木しげるロード内の非日常空間に加えて、広域に連携したホスピタリティーの仕掛けが、年間200万人以上の観光客を引き寄せる魅力だと感じた。7月14日のリニューアルオープンの成功と継続的な賑わいを心から願っています。必ず、また訪れてみたいと思います。



## ■おわりに

初日、松江は大雨の中まち歩きだった。案内していただいた地元の方に言わせると、この程度はちょっとした雨と言うらしい。まちの気候風土、そこに育まれる人々の歴史文化、どんなに交通網が整備され、グローバル化、AI時代が到来しても、「人」という生物は、その地域の自然、人と人が関わりを持ちながら生きている。

境港ではこのプロジェクトの経緯を聞いて、地元、行政、専門家すべての関係者人々の熱意がまちの活気を生み出す原動力であることを実感した。

今回、このような刺激的で有意義な企画に、ご尽力頂いた松江、境港の方々はじめ、ご一緒できたJUDIメンバーの方々へ心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

## JUDI 北前船プロジェクト in 松江を終えて

JUDI 理事 富岡 仁計 (株)住軽日軽エンジニアリング)

「松江」と聞いて、島根県にあって、夕焼けがきれいな宍道湖のほとりで、町中に水路が張り巡らされた美しい城下町。と即座に言える方は、松江で数日以上を過ごされた方であろう。日本海側の都市のほとんどは「そこへ行く！」という強い意識を持たない限り、伺えないところが多い。太平洋側の都市とは異なり「立ち寄り」ことが物理的に難しいためでもある。しかし、これこそがその都市の魅力を永く維持できる要因のひとつであると考えている。私は以前、幸運にも3日間この松江に滞在させていただき十分に堪能した。松江城も宍道湖もお堀のまち並みも県立美術館も訪問できた上、今回の北前プロジェクトでは伺えなかった一畑電車に乗って出雲までという小旅行のおまけもあった。松江と出雲は一畑電車で1時間ほどの距離であり、観光地としてのポテンシャルの高さに当時おおいに感銘を受けた記憶がある。このたびの北前船プロジェクトの2日目では、同じく1時間程ながら出雲とは逆の境港へ赴き、新たな取り組みを拝見させていただいた。この3都市は日本海側には珍しく「立ち寄り」可能な位置関係にあり、それぞれがそれぞれの取り組みによって魅力ある都市を形成していると感じた。

「なにが立ち寄りを可能としているか」であるが、ひとつは「水」でつながる歴史であろう。出雲の東端を流れ宍道湖に流れ込む斐伊川では、「出雲国風土記(733年)」に舟運の記述があり、江戸時代には松江藩が米を中心とした物資を宍道湖から中海をとおり日本海へと多く運んだことなどが、この3都市を関連づけてつその後の発展に大きく寄与したと思われる。反面この「水」により長く悩まされた土地であることを今回の訪問で知った。破壊の源となる「水」は手入れすることで、繁栄の礎になることを、古人は知っていたのだと思う。その積み重ねが今のまちの魅力へと確実に継承されていることに、改めて感心させられたし、現代人もその歴史を十分に踏まえつつ、少しずつ手を加え続けていることに驚いた。

もうひとつは、それぞれの「趣」である。「水」のつながりにより画一的になることなく、この3都市は独自の発展を遂げたようである。それぞれの象徴をひとことで言い表すと、大社と城と妖怪となる。どれも歴史的なものであるが、大社と城ではその歴史に1000年以上の差があり、現代に現れた妖怪と城とは400年の差がある。この時空を超えた立ち寄り旅行地は、訪れる者に多元的な刺激を与え、それぞれの居場所を与えてくれるのではないだろうか。日本の神々が集まる大社で縁結びを祈願するもよし、世界に影響を与えた「江戸」の香りが残る城下町で水辺に親しむのもよし、いまや「世界のマンガ」となった日本のポップカルチャーの草分け的存在と戯れるもよし、お好み次第なラインナップである。

このように並べると境港の開発意義は大きい。通常、アニメを含む歴史の浅い何かをテーマとした街づくりは、どこか希薄なものとなりがちであるが、地元産の来待石を用いるなど細部にまでこだわる整備により、1000年以上に歴史の差がある都市と肩を並べ、山陰地方立ち寄り旅行ゾーンの一部を占めるに十分に値する存在になっている。いまの境港は出雲と松江、それぞれの価値をさらに引き立たせる現代人にとっての指標となりつつあるのではないだろうか。古代の出雲、中世の松江、現代の境港、それぞれの時代を映すモニュメントを持つ3都市は、今後もそれぞれの形で大切に継承されたいし、立ち寄り地同士として刺激し合っていてほしい。

今回の北前船プロジェクトは北前船らしく「立ち寄り」ことの重要性を改めて考えさせられた。そこには違う価値があって初めてお互いが成り立っているし、これこそが発展の原点であるよう

に思う。我々北前船プロジェクトの乗組員は、この違いを見極め、価値として積み込み次の寄港地へと向かわなければならない。今回も良い経験を積み込めたと思う。



美しく整備された松江市内の水辺



水につかった父さん



中海では対岸が見える、行きたくなる



サイクリングでの立ち寄り可

J U D I 現地研修レポート

J U D I 正会員 灘 英樹 (境港市役所)

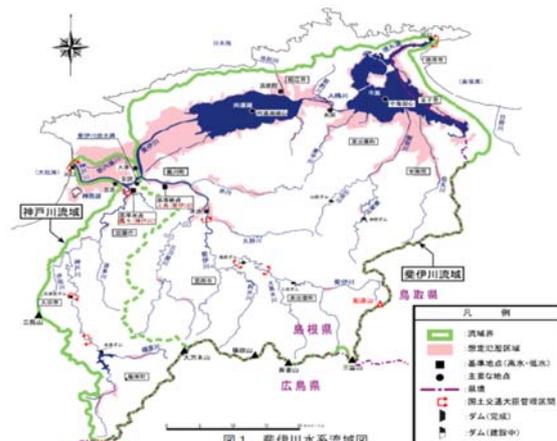
はじめに

初日はあいにくの雨となりましたが、斐伊川(松江)についての興味を深めていただき、地元住民にとっては本当にありがたいものがありました。国土交通省よりコミュニティープラザでご説明がありましたが、この松江という場所が持つ水辺の環境というものは、おそらく他には例を見ない(世界的にみても)特殊な地形と環境を有したところと言えます。

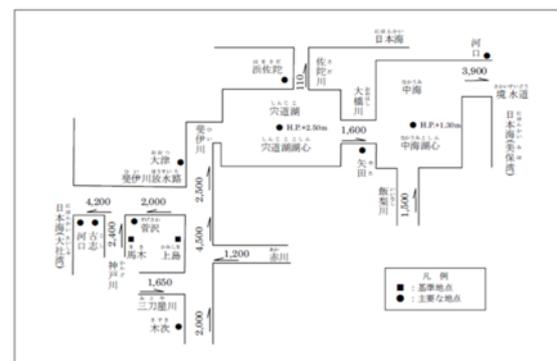
一級河川の中流域に大きな汽水湖が二つ連なる形で存在し、その面積も非常に大きく、その深さにも特徴があり、上流側の宍道湖の水深は、下流側の中海より深い、さらにこの2つの湖を結ぶのは、市街地を流れる河川(一級河川斐伊川)であり、その大半の護岸は無堤防となっており、実際のところこの2つの湖もこの河川の一部となっている。

このような特殊な地形であることから、豪雨時には上流からの水によりこの閉塞部の市街地の河川が氾濫し灌水、一方で、高潮時には下流の湖の水位が上昇することでこの河川部分が灌水、まさにこの地域はむかしから数十年に渡り悩まされてきた。このような状況を受け、大正時代から国の直轄事業として治水事業に取り組みられてきた。平成14年に現在の斐伊川河川整備計画が作成され、段階的な整備される中、ついに上流域にダム2基、中流域に直接に日本海に分流放流を可能とする放水路、下流域は無堤防であった護岸改修と2つの湖を結ぶ大橋川の拡幅工事が進められることとなり、すでに、上流域のダムと中流域の放水路は完成を見ており、残すは下流域の河川拡幅と護岸整備が現在進行形である。

これがすべて完成すれば、治水面からの安全度は大幅に改善される。そうなれば、このように親水性に富んだ水辺の空間利用に目が向けられる。今回のJUDIの皆さんの視察にこの地を選択していただき、この世界的にも珍しい地形であ



項目	諸元	備考
流路延長	153 km	全国 19 位
流域面積	2,540 km <sup>2</sup>	全国 24 位
流域市町 (7市4町)	島根県 (5市4町) 鳥取県 (2市)	松江市、出雲市、大田市、安来市、雲南市、東出雲町、奥出雲町、飯南町、斐伊川町 米子市、境港市
流域内人口	約 51 万人	
支派川数	244 河川	斐伊川：226 河川、神戸川：18 河川



**昭和47年7月洪水による浸水被害**

昭和47年7月9日～13日にかけて梅雨前線が中国地方に停滞  
→斐伊川、神戸川とも暴降寸前の危険な状態に  
→一次高潮の増水により、松江市や出雲中野東部をはじめとする「宍道湖沿岸」が「高潮」による  
→出雲空港においては10日朝にわたる全道閉鎖、約12日間の夜間閉鎖

被害状況	神戸川	斐伊川
浸水区域	約2.5km <sup>2</sup>	約70km <sup>2</sup>
床上浸水	271戸	7,789戸
床下浸水	1,009戸	17,164戸
浸水家屋計	1,280戸	24,953戸

**平成18年7月豪雨による浸水被害状況**

松江駅前(主要道路)の冠水状況

止水板にて辛うじて水没を免れた地下駐車場

り、国内でも有数の親水性が高い水辺の空間の有効的な利活用方法を議論していただく機会を設けていただいたことは地元にとっても大変有意義であり、タイムリーなことであると感謝しております。

地元民として皆様の議論いただいた内容に対して感じることは、まずは、親水性ということがあります。地元民としては、ほかの地域の実態を知らないこともあり、干満の差が1m程度と言うのは非常に大きいという認識がありました。関東地方ことに東京沿岸部では2m以上は当たり前という状況を聞くとびっくりいたしました。その中で、1mの干満と洪水のリスクが大幅に解消ことで、これまで以上に安全で水際の親水性を感じられる場所であるということを再認識したところでもあります。そうなれば、いかにこの空間を有効に活用するかということが今後のテーマ課題になります。

歴史を振りかえると、江戸時代この松江は松江城を中心として水郷の町栄え、現在でもその堀は残っており、遊覧船等による観光資源として活用されている。そのことから、利水技術はこのころから発達してきたといわれています。一方、前述した堀の本体となる河川本流の斐伊川は「暴れ川」として恐れられていたこともあり、その立地を活用されることもあまりなかったことから、いわば手つかずの状況は保存されている状況となっている。

今後、急がず、長い時間をかけてこの素晴らしい環境を生かす計画を立案していくことは、この地域にとっては重要なことであり、もしかしたら遠い将来、日本遺産や世界遺産を目指すことも不可能ではないと感じるところであります。この自然と歴史と文化を兼ね備えた地域を大切にしていかなければならないという気持ちに改めてなりました。

私は懇親会には参加できませんでしたが、この特殊な自然環境は食文化にも表れています。『宍道湖七珍：ウナギ、スズキ、シラウオ、コイ、モロゲエビ、アマサギ、シジミ』とって汽水域に生息する7種類の魚介類を使った料理が名物となっています。

加えて、日本海の魚介類、少し山間に入ると山菜、また、島根和牛もおいしい。まさに食の宝庫である。さらには、松江城の城下町としてお茶の文化が根付いており、その影響からおいしい和菓子も多い。和菓子を愛した松平不昧公の没200年が今年にあたります。

このように、この松江（島根）の地は、自然科学～歴史、文化といった人文科学に渡りたくさんの研究素材に満ち溢れている地域であります。ぜひ、今後もこの地を研究フィールドとして活用いただければ幸いです。何か観光レポートのようになりましたが、今回、当地にお越しいただきましたことを改めて御礼申し上げます。

## 松江の観光地としての魅力

平松早苗\_(株)ars 設景研究所

松江城が国宝になる以前から、松江の街は古都以水の都のイメージがあったと思う。ただ、40年ぐらい前、周辺の市町村からみて中心的市街地である松江は、道路の構成は江戸時代のままで、道幅の狭い丁字路のせいか車の渋滞が多く、距離以上に移動に時間のかかる町であった。

近年は自身の運転で来ることが多くなったが、幹線道路が整備され、駐車場の誘導や空車情報も多く、通行しやすくわかりやすい印象である。一方で、車で降りて徒歩で歩くと、必ずしも歩きやすく魅力的な街という感じではない。歩車道境界の段差は以前比べて解消されたところも多いが、歩道幅員は狭く、観光客の散策ルートとしてはまだまだ不十分であるように思う。



図：出雲国松江城絵図（国立公文書館蔵）HPより

松江城は行政エリアと隣接しており、バス等の交通も集中しているが、お堀周りの道路は以前に比べて車の交通量が減った印象である。ただそれ以上の観光客が増え、安全に散策を楽しむ状態とはなっていない。北九州市などもそうであるが、公地であったことから市役所や学校が城の中にあり、観光と行政等が隣接している都市は多くみられる。かつての金沢市も城の隣接地に大学や学校があったが、いくつかの官公施設を残し、城外での移転が進み、広域な観光エリアとしての魅力を発信している。

松江においても、かつては宍道湖とその水を引いた城内外の魅力的な水辺空間があったと思われる。観光資源として松江の街を見ると、松江城は歴史的に残った遺跡であり観光資産であるが、城周りの景観は、国宝松江城を補完する新しい観光資産を創出する可能性をもったエリアであり、国宝となった現在、その観光資源としての価値は、ほぼ永続的であることが想定されることから、金沢市規模の観光に向けての整備を進める選択もあるように思われる。

一方で、天神川沿いの暮らしが垣間見える水辺空間は魅力的であった。水路沿いに高さのある建築がないこともあるが、道路のレベルに近い穏やかな水面が広がり、護岸の石積みと水辺へ近寄れるしつらえは観光地ではないが、来訪者に松江の魅力を伝える空間となっていると思う。

道路沿いの植栽とそこから1段下がったところの通路+植栽は、道路を挟んだ向かいの人が管理しているのか、川沿いにも各家の個性が見られた。管理が行き届いた印象も良いが、加えて、人の暮



らしが垣間見える個性ある草花が魅力的である。私自身は仕事から、観光地に行くと、代表的な観光ポイントに行く以外に、とにかく町中を歩く。外国の旅行者が SNS にアップした画像に、「なんでこんなところを」という話を聞くことがあるが、それらの中には、私が興味をもっているような、地域の暮らしが垣間見える状況の写真も少なからずあるように思う。その地域の人のくらしの発見することは、観光の魅力の一つであると思う。

それはその地域の独自性のあるものである場合もあるが、特別その地域限定のものでない場合もある。川沿いの景観は、河川管理者によって雑草がなく美しく管理された河川空間は、それはそれで魅力的であるが、天神川沿いで見られるような草花の魅力とはちがったものである。その草花に対する魅力はそこに暮らす人の個性が感じられ、その家の人が大切に管理されている日々も積み重ねが感じられるからで、一時的に写真におさめられた風景だけではない魅力を感じることができるからだと思う。



今回の視察の中で可能性を持った通りであると思ったのはアーケードである。御多分にもれずシャッター商店街が多く見られたが、現況の民地境界が歩道部分を含んでおり、1階部分の利活用のかたちによっては、古いシステムの新しい形の展開が可能となるように思われた。ギャラリーやカフェ、情報発信の場やコミュニティ形成の場等々、公共空間に顔を出した町の個性（＝個人の個性？）は魅力的である。営業＝収益を目的とするとその展開は難しいものであるが、「住まい兼用の趣味としてのミセの開設」や、「個人が自由に使える公共的空間」など、画一的でない公共空間の創出の可能性をもっているように思えた。

また、建築協定によって、2階部分が張り出したポルティコがある街区景観の形成も面白いように思う。（イタリア・ボローニャに代表される様式ではあるが、あくまで連続性の魅力であって、イタリア風の街ということでは決してない。）軒先の連続性ということでは、青森県黒石市のこみせ通りのように豪雪地域にみられるが、山陰地方も雨は多く、そういう点で商店街がアーケード空間となっているのは地獄的必然ということもあるかと思う。

民地であることの魅力は、ほぼ公共的である空間に対して、個人の個性が発揮できることにある。場合によっては悪趣味な広告の乱立になる可能性も含んでいるが、前記の天神川沿いの草花のように、個人の個性を出しながら大切に管理され、魅力的な空間となる可能性をもっているように思う。

今回の視察で翌日見て回った境港市（私の郷里ですが）は、まだ、住まい手の魅力発信という段階に至っておらず、行政の整備に住民が乗っかっている状態であるように思うが、松江と同じく山陰の中心的街である米子市はシャッター商店街が少しずつではあるが面白い店ができてきているように思った。それもアーケードのある側にはなく、かつてはアーケードの裏側に川が流れていたことなど知らなかったが、川側とアーケードをつなぐかたちでミセが作られている。松江はその点でも可能性の高い地域だと思われる。

## 境港の観光地としての魅力

境港市は私の郷里で、両親も親戚のほとんどがこの市に住んでいる。高校卒業と同時に上京し、早 30 数年、年に 1~2 回は帰省している。そのようなことで、なかなか客観的には書けないところがあるが、多分に私的望郷の部分を含めていることをご理解いただきたい。

郷里というのはそういうものなのかもしれないが、「境港はこの 30 年、大きく変わった」という部分と、まったく変わらない部分がある。

大きく変わった部分は「観光」の部分で水木しげるロードの整備とともに急速に観光地化が進んだ感はある。妖怪のブロンズ像が置かれた整備当初は、もともとの商店が店先に鬼太郎グッズを並べた態度であったが、NHK の朝ドラの影響等々で観光客が急増すると、県外資本の土産物屋が出てくるようになったと聞く。その頃、観光客がいるほどに儲かってはいないと、地元店主は言っていた。

この商店街もかつては境港では目抜き通りで、夏場は土曜夜市があり、花火大会の時は人で通行が困難なほどであった。その後は全国の地方都市と同じ道を進んでいたが、そこからの急展開があったわけである。



写真：今も元の商売を続ける店

そんな郷里を観光客気分歩いてみて、買いたいものや食べたいものがあるかと聞かれると、実に返答に困る。実際に今回私が購入したのは、電気屋のオヤジ手作り目玉おやじのフィギュアである。店の数もそこそこあり、品数も多いのであるが、どこの店に入っても同じものを売っている。または、ここでなくてもよいような原宿の可愛いもの屋のような商品も目にする。キャラクター商品であるから仕方ないのであるが、幸いにして水木氏の世界観は幅広く、展開は可能で、ゲゲゲの鬼太郎以外の商品（全国、世界の妖怪関連商品など、ただしキャラクター商品は除く）もあってよいのではないかと思います。また、意外に海産物の店は少ない。水産物直売センターとのすみわけがされているのかもしれないが、観光客の目線で考えると、水木しげるロードは行っても水産物直売センターに行かない（交通手段がないから行けない）人は多いかと思う。

それと、水木しげるロードを抜けてお台場の区間や、裏通りを散策する観光客も少なくないように思った。ほとんどは 2, 3 人のフリーの旅行者のようであるが、このエリアの魅力は大きいと私は思う。ただその魅力は水木しげるロードやおさかなロードのように役所による整備ではあってほしくはないと思っている。

例えば、北海道恵庭市は観光施設もあるが、町中に花が多いことで有名である。行政による歩道の花壇もきれいであるが、始まりは開放的な個人庭園が花で美しく飾られ始めたことからである。個人が先で、行政が後を追う形である。個人の趣味なので予算はないが、自分の好きなことにお金をかけて個性を出して自由に楽しんでいる。恵庭の場合は、それがいい形で循環して観光につながっていった。

水木しげるロードの裏通りやお台場までの区間は、一部に古い家や蔵が残り、ゆっくり散策するには良い場所である。時間のない団体客が通るところではないので、観光を目的としない地域の魅力アップ化を図るには面白いエリアだと思う。かつては漁師の家の前に漁具や網がかけてあ

った風景が記憶にあるが、そういう住む人の個性が出た裏通りは魅力的であるように思う。今はそのような小規模な漁師はいないのかもしれないが、例えば、かつて使っていた漁具が何か違う形で人目に付くところにおいてると、港町の個性が出せるように思う。個人的にはたこつぼ（できれば貝とか付いたもの）を植木鉢にしてみたと思っている。市民個人個人のアイデアや工夫によって創出することが、町の個性と多様な厚みのある風景を作り出すように思う。

その一方で、変わらない部分。正確には人が歳をとるように緩やかに変わっている部分について、マイナス要因としてとらえがちな「高齢化」ということもあるかもしれないが、町が高齢化して衰えてしまうという感じではなく、住んでいる住民の多くが歳をとってきたという感じであらうか。

帰省してまず変わらないと思うのは、空の広さであり、そこに見える島根半島と、潮くさい浜風である。地理的特徴はそう大きく変わるものではなく、また同じものが少ない地域の特徴・個性を出せるところだとも思う。

私が生まれ育ったのは境港市上道町の灘道沿いの家である。灘道とはその名前通り、かつては海岸沿いの道で海岸線と並行に少し曲がりながら米子方面まで伸びている。上道町のメインストリートである。



この上道町のメインストリートには4軒の雑貨屋（いろいろなものを売るコンビニのようなところ）と肉屋があった。今はすべてなくなり、1軒の蔵を改造したカフェと、「ここあん」という私設の子ども・子育て支援空間がある。カフェのオーナーは定年後に自宅の蔵を改造し趣味の音楽とコーヒーのカフェを開いた。「ここあん」の方も営業的なところは考えていないような運営であると聞いた。開設の目的や意識は高くとも、個人の努力や好きであるということでありたいように思う。

話は少しそれるが、島根・鳥取は女性の幸福度が高いという話を聞いたことがある。その要因は女性の就労率が高く、自発的な行動を可能としているからではないかということであった。「ここあん」のオーナーも女性であるが、こういう自発的な活動が、上道町のメインストリートを活活性化させる可能性をもっていると思う。ここに限って言えば、高齢化は衰退化ではないと思う。

それで、私の生まれ育った家は移築100年で、その前も入るとそこそこ古い民家がまだ残っている。東京にいて、何ができるわけでもないが、とりあえずは、灘道に面した軒下にベンチとプランターを置く小さなプロジェクトを始めてみようと思う。ガラス戸もちょっと遊びを加えてみようかと考えている。そうはいつでも東京と境港は遠く、起動は早くて今度の帰省の時になるであろう。



## 松江市について

### ●大橋川改修事業はまちづくりとの連動が鍵

- ・ 大橋川改修事業については、国交省斐伊川・神戸川治水事業の一環として、松江市街地の整備と連動する形で進められており、この事業の実施効果として、「中心市街地の防災機能の向上」と「大橋川を活用したまちづくりの進展」をマストとして推進されていると理解しています。
- ・ この中で、大橋川改修事業推進におけるまちづくりの鍵を握るエリアは、「白潟本町エリア」であることは意見交換の中で改めて確認されました。
- ・ 上記の認識のもと、松江市では28年度において、「大橋川を活用したまちづくり」構想を検討立案することとなり、松江商工会議所にJR松江駅前周辺整備構想委員会を設置して検討を進めてきた経緯があります。
- ・ 松江市は「中心市街地活性化基本計画」の認定を受け、中活を推進していることから、上記の検討においても、松江駅周辺の位置づけ、大橋川改修と中活との関連付け、松江市中活協議会としての合意形成が課題とされていた状況があります。

### ●「白潟本町エリア」は中心市街地活性化のコアエリア

- ・ 中心市街地活性化において、松江城とJR松江駅をつなぐまちなか回遊軸の中で、「松江城辺エリア」⇔「殿町エリア」⇔「白潟本町エリア」⇔「松江駅周辺エリア」をコアエリアとして事業化の動きを組み立てていくイメージは共通の認識となっているように思われます。
- ・ そして、白潟本町エリアについては、昨年実施された「日本建築学会のシャレットWS」では、山陰合銀本店跡地の活用を核としたまちづくり事業を先導的に推進することがアイデアとして提言されており、「大橋川改修事業の推進」にも寄与するものであったように思われます。
- ・ ただし、実現への課題として、地権者の理解と事業主体の構築があるものと思われませんが、オール松江でまちづくり事業会社を組成し、松江市が支援する形で事業化する仕組みを考えるべき段階にあるように思います。
- ・ この意味で、行政と中活協議会が連携し、中活協議会を活かすようにして、地域の住民、地権者も巻き込んだオープンな議論を進め、この中で実現性があり、地域合意ができるまちづくり構想が確立できれば、白潟本町地区のまちづくりが具体的に起動することになり、大橋川改修事業の推進につながっていくのではないのでしょうか。

## 境港市について

### ●200万人の観光集客力を活かすという課題

- ・ 今回の「水木しげるロードリニューアル」により、街路植樹や道路舗装がより魅力的にデザインされ、「妖怪」イメージともマッチングして素晴らしい環境になっており、200万人を超えるといわれる観光客へのもてなし効果はさらに高まるものと思われます。
- ・ 一方で、市の施策課題の説明にもありましたが、観光客が境港に金を落とす仕組みが十分にできていないことから、今後は、地域振興の観点からも「活性化の真の効果」を追求していく必要があるとの指摘に同感しました。
- ・ 水木ロードのリニューアル後を考えたとき、200万人の観光客を活かし、地元の「稼ぎ」につなげていくビジネス創造が必要であり、民間が主体的に取り組んでいく、実行力のある体制づくりが大いに課題と思われます。
- ・ 今後、民間の手で観光客の地元消費喚起や地域の産業創造に主体的に動いていくことが望まれますが、商店街組織としての「水木ロード振興会」はまちづくりを能動的に推進していただくだけのマネジメント力を有しているようには見受けられませんでした。「水木しげるロードリニューアル」も市がけん引してきた状況にあり、そのため民間の取り組みについては、行政への依存性を高めているようにも思われます。

### ●民間の取組み喚起への展望について

- ・ 私は、中小機構の中心市街地サポートマネージャーとしての立場で感じたことですが、ここまで成長してきた境港の集客力をテコに、民間の方々が「中心市街地活性化」に向かい、投資意欲をもって事業化しようという意思をもてば、中間的な支援機関として「中小機構」が支援でき、地元の「中心市街地活性化協議会」の立ち上げや運営、個別の活性化事業のコーディネートを支援する仕組みがありますので、これを活用してみる好機にあると感じたものです。
- ・ このためには、地元民間サイドにキーマンとなる人材が不可欠であり、「水木しげるロードリニューアル」を機に、商工会議所、地元事業者、商業者にむけて、民間の取組みの必要性と効果などをアピールして、意欲を喚起していくことが第一歩になると思われます。
- ・ 「中心市街地活性化計画」があれば、国の支援も手厚くなる部分もあり、実現性を高めている事例もありますが、なによりも、中心市街地活性化に向かうことで、民間の動きをサポートする機関があることを知っていただければと思います。

## 松江市と境港市を訪ねて

埒 正浩（㈱日本海コンサルタント）

### 1. 松江市について

松江市では、大橋川コミュニティーセンターにて、国土交通省・島根県・松江市のご担当の方より、模型やパンフレット等を用いて説明をいただいた。昭和47年7月に、松江市をはじめ斐伊川・神戸川流域は水害に見舞われ、大きな被害となった。そこで、斐伊川・神戸川の上流・中流・下流が一体となった「3点セット」の治水対策として、上流域では、尾原ダムや志津見ダムの建設、中流域では斐伊川放水路の建設、そして下流域では大橋川の改修と宍道湖・中海の湖岸堤の整備が進められているとのことであった。特に、大橋川の改修については、改修によって0.3~1.0m程度、河川堤防が高くなるとのことであった。

あいにくの雨の中だったが、山陰合同銀行の展望室から宍道湖や松江市街地を俯瞰することができた。市街地を見て気付いたことは、道路がジグザグになっていることである。この辺りは城下町の中であり、敵からの攻撃に備えるため、このようなジグザグの道路（鍵型路）を作ったとのことである。国宝にもなった松江城を中心とし、かつての城下町の町建ての名残が多く残っていると思った。

松江の城下町は、大橋川をはじめ京橋川、米子川、北田川、四十間堀川など水の気配が漂う、うるおいある環境が魅力的である。全国の県庁所在都市かつ非戦災都市で、城下町の雰囲気が残っているのは、松江と金沢くらいだろうか。こうした、堀の水辺をはじめとした道路や町割りなど、城下町として歴史的資産を今後も維持・活用できるかが課題だと思った。

ステックの会議室で、島根県や松江市の職員の方と意見交換したが、大橋川改修に伴う周辺のまちづくりが課題であるとのことであった。水辺に近いということが特長であるため、それを活かしたまちづくりが展開されることを期待したい。

翌日には、バスに乗って境港市へ向かったが、その途中で、枕木山に登り、そこから、中海や大根島を眺めた。また、大根島から江島大橋（通称、ベタ踏み坂）を通ったが、我々と同じような観光客が写真を撮っており、観光スポットとなっていた。

宍道湖から大橋川、そして中海、さらに日本海へと、一連の水辺の連続が松江をはじめ、この地域一帯の魅力だとあらためて実感した。かつて中海には、干拓事業の計画もあったそうだが、その事業が中止されたことにより、この自然環境が維持されることに繋がったとのことであった。今後、こうした自然環境を持続的に守っていくことが、この地域における共通の課題である。



宍道湖と松江市街地



城下町の痕跡が残る松江市街地

## 2. 境港市について

境港市では、計画設計に携わっているJUDIメンバーから、「水木しげるロードリニューアル事業」の現場を案内していただいた。水木しげるロードは、平成5年に誕生し、今なお人気を博している。平成6年には28万人だった年間観光入込数が、平成22年にはNHKの朝ドラ「ゲゲゲの女房」の影響もあり、370万人/年の来場となった。その後も7年連続200万人の来場者があったが、その勢いのあるうちに次の一手をとということで、リニューアル事業をスタートさせたとのことである。

延長は約800m、幅員は15mのうち車道を5mとし、一方通行化している。歩道は4~6mで、ゆったりと歩ける歩行空間とブロンズの妖怪像や植樹の設置空間として活用されている。また、リニューアルオープンが7月14日であり、工事期間は約一年間という突貫工事とのことであった。

現地を歩いてみて感じたことを挙げると、まずは、ブロンズの妖怪たちは面白い。174体の妖怪像を見て回るだけで楽しくなる。ゲゲゲの鬼太郎は、もちろん子供の時にテレビで見ていたので、鬼太郎、鼠小僧、猫娘、一反木綿などは懐かしかった。ブロンズ像は、市民等がスポンサーとなり、120~130万円/体で寄贈されたとのことであった。本事業に企業や市民を上手く巻き込んでいると思った。

次に、植栽が面白い。シダレエンジュ、株立ちのヤマボウシなど、よくこれだけの樹木を集めたものと思った。特に河童の泉という小公園にあるシダレエンジュは、樹形も見事で、その下にはベンチもあり、憩いのスペースとなっていた。また、街路樹は、工事を効率化するために、コンテナ化されていた。枯れた場合は、コンテナごと入れ替えるとのことである。様々な工夫がなされていると感心した。

ハードは、十分に検討されて整備が行われているが、これからはソフト施策が重要である。昭和の町並みということで、緩やかな景観ルールも実施されているとのことであるが、やはり、沿道にどのような店舗が立地していくかが大切である。どこの観光地でもあるような土産屋が並び、店員が大きな声で客の呼び込みを行うようなものはいかがかと思う。器を作って、魂を入れるのはこれからかもしれないが、ぜひ、エリアマネジメント組織により、地域全体で稼ぐまちづくりを展開され、そのお金が地域で循環するような仕組みを作って頂きたい。

境港市は、初めて訪れたが、魅力的なまちであった。また、どこか懐かしさを感じるようなまちであった。昼食で食べた海鮮丼も新鮮で美味しく、さすがに全国屈指の港町である。今後も地元の食材を活かしていただきたい。再訪したいと思いつつ帰路についたが、今回は、境港に宿泊して夜間照明による演出も楽しみたいと思った。



水木しげるロードと昭和の町並み



枝葉が茂ったシダレエンジュ